

# 日本における用語「環境」の導入過程

早 田 宰

はじめに

近年「環境」という言葉は、居住環境、地球環境などたいへん広い場面で多様な意味で使われるようになってきている。それゆえ用語と意味するもの、使用者の関係に混乱が生じる場合もある。

本小論は、環境という用語はどのような意味で、日本でどのように使われ始めたのか、それは *environment* など外国の類似する言葉とどういう関係であるのか、それが影響しあいながらどのように定着してきたのかについてその過程を整理、考察することを目的とする。

そのため、明治・大正期の英語・独語の辞書を可能な限り調査することとし、あわせて環境分野の古典を調査した。

## 1. 開拓使と「取巻ク」意識

### 1) 環境と *environment*

「環境」という用語は、もともと江戸以前は、日本ではあまり使われていなかった。吉山青翔 (2002)<sup>1)</sup>によれば、中国北宋の歴史家の欧陽脩 (1007-1072) が1060年に完成した唐代の正史『新唐書』<sup>2)</sup>のなかで「まわり」という意味で「環境」(*huan jing*)という用語を使っているのが初見である。また、元の歴史を記した『元史』<sup>3)</sup>余闕伝に「環境ニ堡砦ヲ築キ」とある。やはり「まわり」「四方のさかい」程度の意味と解釈できる。ただし、西欧の *surroundings* と東洋の周囲とを比較するとニュアンスがかなり異なることには注意すべきである。西欧では自己と外界が意識上明確に区別されるが、東洋では自分と外界は連続した不可分のものとする伝統が強い。漢字の「環境」が現在のニュアンスの用語法

1) 吉山青翔、(2001. 3)、『環境学総論—地球・社会・思想・情報・メディア』、同文館出版、pp. 114

2) 古賀登、(1971. 10)、『新唐書』、明德出版社

3) 小林高四郎、(1972. 12)、『元史』、明德出版社

をもつタームとなっていくのは、後述するとおり、西洋科学の用語を翻訳して導入した20世紀初頭の日本においてである。

西欧において環境にあたる *environment* という単語が生まれたのは19世紀である。イギリス・スコットランドの評論家・歴史家のT. カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) が用語を導入した。カーライルはゲーテの弟子であり、サン・シモンを敬愛し、J. S. ミルやJ. ラスキンと親交があったが、ドイツ語の *umgebung* に対し、フランス語の *environ* を借用し、接尾語 *ment* をつけて、英語の *environment* を造語した。カーライルの時代以前、17世紀の頃まで遡っても、*environs* は、現在の「周辺」、「近隣」を意味する *neighborhood* に近い意味であった。カーライルの「健康な人は自分の健康に気がつかない。病人だけが健康を知っている。」という言葉はよく知られている。*environment* に含まれる概念は現在に至るまで、社会科学よりも自然科学の比重が高まっているが、カーライルの用法は、「まわり」と「自分」という関係概念について、それまでより客観化して立ち入って論じるために一般用語を抽象化したものであったといえる。

英語、フランス語の *environ*、*environment*、ドイツ語の *umgebung*、フランス語の *Milieu* の訳語として、日本は、「環境」を使い定着したものである。発行されている和英、英和、独和、和独の辞書類で、閲覧可能なものはできる限り調査することとした。その調査結果を表1に示す。

その結果、まず幕末から明治にかけては、その用語そのものがまだ必ずしも一般的ではなかったことがわかる。たとえば、風祭甚三郎『独和字彙 (夏目鉉三郎発行)』(1884)、金子直行纂訳『独和辞書 (誠之堂)』(1893)、恩田重信『独和他国字書大全 (金原書店)』(1900) などの主要辞書には「環境」にあたる *umgebung* は載っていない。

## 2) *environment* の導入と「取巻ク事」

筆者の知る限り、*environment* を掲載した最初の英和辞典は、小林新兵衛『英和對譯辭書 (開拓使)』(1872) である。本書は北海道の開拓使の子弟のために編集・供与されたものである。序文を書いた荒井郁は、「北海道は気候の厳しい場所であるが、樺太はさらに厳しく、北海道開拓はいまだ功を奏していない。開拓を推進するためには、人智と学問の進歩が必要」と作成主旨を述べている。黒田清隆の設置した札幌農学校で使用された。厳しい気候下で開発に従事する人々が、周囲の状況と向き合い、その状態を表現する必要性に直面したために、*environment* という英語が捜され、発見されたといえる。小林新兵衛は、*environ* を「取巻ク」、*environment* を「取巻ク事」と訳している。この時点でまだ環境という翻訳語は使われていないことに注意すべきである。

その後、*environment* は、主要辞書に登場してくるが、川上脩斎『英和字典 (知新館社)』(1872) では、*environ* のみ訳し、「取巻ク、四面囲之」とし、また M. Shibata and T. Koyasu

表1 明治～昭和前期、主要辞書にみる「環境」等用語について

辞書名	発行年	出版社	著者	environ (英)	envi- ronment (英)	umge- bung (独)	環境 (日)
英和対訳辞書	1872	開拓使	小林新兵衛	△	△		
英和字典	1872	川上脩齋	知新館社 友訳	△			
英和字彙	1873	日就社	M. Shibata and T. Koyasu	△	△		
英和字典	1873	六合館	尺振八	○	△		
独和字典	1873.5	三修社	松田為常			△	
哲学字彙訳語総索引	1881	笠間書院	飛田良文 編				△
英和字彙 第二版	1882	日就社	柴田昌吉・子安峻	○	○		
哲学字彙	1884	東洋館	井上哲次郎・有賀長雄 増補		○		
独和字彙	1884	夏目鉉三郎	風祭甚三郎			×	
英和辞書：新訳無双	1890.11	戸田直秀	棚橋一郎	○	○		
独和辞書	1893.6	誠之堂	金子直行 纂訳				
独和他国字書大全	1900	金原書店	恩田重信			×	
独和字典大全	1901	南江堂書店	小栗栖香平・福見尚賢			△	
普通術語辞彙	1905.8	東京敬文社	徳谷豊之助・松尾勇四郎			◎	
英和工学字典	1908.11	太陽社	丸善	×	×		
井上和英大辞典	1916	至誠堂	井上十吉				◎
新しい主義学説の字引	1920.1	実業之日本社	勝屋英造 編				×
新言海	1920.5	中央タイムス社 出版部	上田景二 編				×
大英和辞典	1921.6	大倉書店	藤岡勝二	○	◎		
現代語解説 上巻	1925	龍溪書舎	上の著者：文化之日本社 下の 著者：文化之日本社編輯部				×
英語から生れた新しい 現代語辞典	1925	大空社	著者：上田由太郎叢書の監修： 松井栄一・曾根博義・大屋幸世				×
英和現代新語の訳し方 と使ひ方	1925.1	太陽社	山川作治郎	なし	なし		
スタンダード和英大辞典	1926.1	大阪宝文館	竹原常太				◎
現代語辞典	1926.1	素人社	素人社 編				○
現代用語辞典 十版	1926.2	玉井清文堂	秋山湖風・太田柏露				△
新英和大辞典	1927.3	研究社	岡倉由三郎	△	◎		
英和大辞典	1928	三省堂	斎藤精輔	△	◎		
大日本国語辞典 第三版	1928	大倉書店					×
新しい言葉の泉	1928.1	創造社	高谷隆				○
新しい言葉の泉	1928.1	創造社	高谷隆				×
斎藤和英大辞典	1928.6	日英社	斎藤秀三郎				◎
新しい時代語の字引	1928.6	実業之日本社	実業之日本社出版部 編				×
モダン語辞典	1930.12	誠文堂	鶴沼直 著				×
アルス新語辞典	1930.12	北原鉄雄	桃井鶴夫 編				◎
時勢に後れぬ新時代用 語辞典	1930.7	磯部甲陽堂	磯部規矩雄 著				◎
ウルトラモダン辞典	1931.6	一誠社	鷺尾義直				◎
現代語大辞典	1932.3	一新社	藤村作・千葉勉 共編				×
必要新語辞典 一般社会	1933.1	赤畑閣書房	赤畑閣編輯部 編纂				×
モダン常識辞典	1933.1	実業之日本社	実業之日本編輯局 編				×
モダン流行語辞典	1933.1	実業之日本社	趙町幸二 編				×
モダン語辞典	1933.3	好文閣	伊藤見二				○
新語の考察	1944.7	三省堂	加茂正一 著				×
新しい時代語の解説	1949.4	東和社	朝日新聞社調査部 編				×

## 【凡例】

- ◎ 「環境」という用語を使っているもの
- 「環生」「環象」という用語を使っているもの
- △ environment, umgebungなどをとりあげつつも「取り巻く」「囲む」などの表現のもの
- × とりあげていないもの

『英和字彙（日就社）』（1873）では、*environ*を「圍ム、包ム、取巻ク」、*environment*を「圍事、取巻事」と訳している。棚橋一郎『英和辞書：新訳無双（戸田直秀発行）』（1890）まで時代が下っても、*environ*を「圍ム、包ム、取巻ク」、*environment*を「圍ム事、取巻ク事」としている。

また、ドイツ語としては、松田為常『独和字典（三修社）』（1873）が早い。そこでも、*umgebung*を、「取り巻ク事。周り。渡邊（キンタン）ノ人。」とし、飛田良文編『哲学字彙訳語総索引（笠間書院）』（1881）でも「外界ノ事物又ハ事情」と訳している。

## 2. 進化論がきっかけとなった「環象」

*environment*は、西欧ではただ取り巻くことというより、自然科学的な循環的秩序、事象の連関性の概念が入っているといえる。そのニュアンスを問題とし、「環」、「繞」という字を初めて訳に当てたのは、尺振八である。尺は『英和字典（六合館）』（1873）にて、*environ*を「環繞<sup>かんじょう</sup>ノ地」、*environment*を「圍繞、圍繞スルモノ」と訳している。「環繞」は漢語であり、人間の生活を取り巻く対象の中でも、自然や神など永遠の連続性を有するものの描写に使われるケースが多い。たとえば、日本では肇国創業で、伊邪那岐、伊邪那美の後に生まれて高天原から日本に降りた天照やスサノヲなどの神々を「環繞<sup>かんじょうほっしん</sup>八神」と呼ぶが、「環繞」には雄大なスケール感がある。

H スペンサーが1864年、『生物学原理』で適者生存（*survival of the fittest*）の問題提起をし、また、1862年、『第一原理』頃から進化（*evolution*）というタームを社会学で使い始めた。また、1869年ダーウィンが『種の起源』で*environment*の生物学上の重要な役割を論じた。それ以後、生物学はスペンサー社会学の影響を逆に受けながら、また社会科学も生物学を応用しながら、科学としての*environment*の概念が浸透していく。それを受けて日本でも、人間や生物の科学的現象の意を込めて*environment*を訳す必要に迫られた。そこで「環象」という、中国で事物の境界という意味で使われる別の言葉を捜して当てることを試みた。柴田昌吉・子安峻『英和字彙 第二版（日就社）』（1882）<sup>4)</sup>は、1873年版の修正版であるが、そこで柴田らは、*environ*を「圍ム。包ム。環繞スル。連累スル。」、*environment*を「圍住。環繞。環象（生物學ニ云）」と注釈している。慎重に、生物学の変化によるためと理由を明記していることが興味深い。このとき以来、日常用途上と科学の専門用語とで使い分けがされるようになってきたといえる。井上哲次郎・有賀長雄『哲學字彙（東洋館）』（1884）でも、*environment*を「環象（生）」と注釈をつけるようになってきた。

4) 柴田昌吉・子安峻、(1882)、『英和字彙 第二版』、日就社

### 3. 社会的ダーウィニズムが広げた環境

それでも、生物学界でも「環象（生）」はまだまだ一般的ではなかった。立花銑三郎『生物始源 一名 種源論』（1896）は、ダーウィンの『種の起源』の和訳である。ダーウィンがジオフロア・センチ・レールの学説を紹介するため、*environment* を使う箇所があるが、立花は、「変化の原因として主に生活の事情若しくは周囲世界に頼りたるものの如し」と叙述し、「周囲世界」と訳した。また、渡瀬庄三郎は『ダーウィンの一生及びその事業』（1905）<sup>5)</sup>で、*environment* にあたる語彙は「境遇」を使用している。またダーウィンのみならずワイズマン流の進化論を咀嚼していた石川千代松の『進化新論』（1908）<sup>6)</sup>でも、*environment* にあたる語彙は「外界」をまだ使用している。

1880年代になると、世界で、社会科学分野に進化論を適用した、いわゆる社会的ダーウィニズムの概念が広がり始めた。アメリカでは、E. ヘッケルを継承し、用語 *ecology* を造語したH. スワローが1879年ころからMITを基盤に、女性運動、環境運動を開始し、ダーウィニズムの系譜をひくゴルトンの優生学とは異なる人間と環境の関係にかんする理論の究明と体系化の挑戦を始めていた。一方、日本では、1878年、モースが外山正一の招きで東大教授となり動物学教室を担当していた。モースに招かれフェノロサが来日し、スペンサーの「社会学原理」を講義し、日本に紹介された。それを受け、1882年加藤弘之が『人権新説』を著し、生物の優勝劣敗は必然であり、人権は決して天賦でないと主張して、馬場辰猪、植木枝盛らと論争になっていた。その結果、人間が所属する社会集団がつくる文化環境と自然環境の使い分けやその関係についてのきめ細かい考察や論争が進んできた。それゆえ *environment* に対して「外界」「境遇」「取巻事」などのように人間との関係からばくぜんと説明する言葉を訳にあてていることに限界が感じられるようになり、西欧のような自然科学的な循環的秩序、事象の連関性、主体との相互作用の概念を加味した言葉が求められるようになっていった。

日本で「環境」という用語を最初に使ったのは著者の知るかぎり、社会的ダーウィニズムの教育思想家で、優生思想の普及、公衆衛生の改善にむけて開明的な活動を展開した市川源三とその周辺であろう。1900年、市川源三は、『パーカー氏統合教授の原理』<sup>7)</sup>を著し、その中で *environment* に「環境」という用語を当てた。市川は人間社会を取り巻き、人間に文化的、自然科学的な相互作用をもたらす重要な要素を表現する言葉として「環境」を使ったものと解される。市川は学際科学の体系を考察し、自然科学の知識を社会に応用しようとしていた。F. パーカーを引きながら、児童に教える中心科目は、「天則」に

5) 渡瀬庄三郎、(1905.8)、『ダーウィンの一生及びその事業』、出版社不明

6) 石川千代松、(1897.2)、『進化新論』、敬業社

7) 市川源三、「パーカー氏統合教授の原理（1900）」は以下文献に収録されている。石川栄司編集、(1906.2)、『教育学書解説』、育成会

近いものをまず統合して教えるべきとし、地理学、地質学、鉱物学、歴史学、人種学、倫理学、動物学、植物学、気象学、天文学の10科目を基礎と考えた。人種学はゴルトンの優生学の影響である。

市川は、『パーカー氏統合教授の原理』の中で、「地理学と気象学は生活體の四圍を研究する学」であり、「人類進化の歷程を明らかにせんとすれば、其の環境、事情、勢力等の、彼の動作に影響したるものを討究するの必要」があり、「個体的生活の活ける環象即ち団体は各個体と交互作用の影響があるものであるから、四圍の風土気候と共に之が研究をなすべき必要がある」と述べている。市川は、それらの10科目は、物質と勢力とは何かを理解させるためのものであり、統合のために、生活の観点から化学と物理の考え方を身につける必要があると考えていた。これらを核に人間の「自己盡力」を高めることが教育と考え、特に新しい女性教育に力を注いだのである。市川は、個人の周囲にある人間集団の社会を「環象（団体）」といい、さらにその周囲にある自然を「環境（四圍）」と使っていることが注意されよう。それ以後、*environment*の訳語として、「環境」という言葉が、公衆衛生、児童教育、婦女教育の分野で広がっていった。

徳谷豊之助・松尾勇四郎『普通術語辞彙（東京敬文社）』（1905）<sup>8)</sup>では、その経緯を簡潔によく説明している。

「環象」とは、「英 *Environment* 独 *Umgebung* 環境又は圍繞<sup>いじょう</sup>とも譯す。」とし、その意義は「(一) 普通、環象と謂へば、有形たり無形たり、事物たり、勢力たり、其の何たるかを問はず、總て其のものの周圍を圍繞する一切物を云ふ。例へば、吾人の心意を其のものとすれば其の心意に影響する一切物は總て環象である。(二) 元來、環象と謂ふ語は、有機體に影響を及ぼす一切の事情條件状態を旨意す、而して此の本来の意義は、更に轉用せられ、其の構成素たる細胞に對して、有機體は環象なりと稱し、又吾人の心的生活の條件を表すために、道德的環象、或いは社會的環象等謂ふが如く、廣く外圍の影響的事情を旨意する為に用ゐらる、環象と謂ふ語の生物學上廣く用ゐらるるに至りしは、全く「スペンサー」の功である、氏は有機體と環象とは、動となり反動となるものなるを主張した。」とある。

#### 4. 定着する「環境」という用語

やがて「環境」という言葉を中心概念に据えた専門書が日本でも出版され、一般に普及するようになる。人文地理学者の小田内通敏は、E. センプルが環境決定論を展開した書、『*Influences of geographic environment*』を訳し、『地的環境と人生』（1917）<sup>9)</sup>と題して出版

8) 徳谷豊之助・松尾勇四郎、(1905. 8)、『普通術語辞彙』、東京敬文社

9) エレン・チャーチル・センプル著、小田内通敏訳、(1917. 7)、『地的環境と人生』、大日本文明協会

した。また、1918年、島田三郎、安部磯雄らが編集する男女貞潔の理想と公娼廃止の主張をする開明的な雑誌『清郭（清郭会本部）』では、第90号で「遺伝と環境」を特集した。発刊の辞では、「環境は人生の平面であり、遺伝は其の立体である」、「優種学（ユーゼニックス）の如きは最も新しく開かれたる学問」、「環境と優種を作り出さん事は、本会の使命」と宣言している。12の執筆者が各分野から提起を行っている。分担は、島田三郎（巻頭・前衆議院議長）、山内繁雄（生物学）、安部磯雄（社会学）、永井潜（善種学）、高島平三郎（心理学）、内ヶ崎作三郎（倫理学）、麻生正蔵（婦人問題）、一條忠衛（男女道徳）、大場茂馬（犯罪学）、片山国嘉（酒毒）、岡村龍彦（梅毒）、柏田五郎（精神異常）らである。しかし文中では、「環境」を使用する者と、「境遇」を使用する者にわかれていた。

また芸術分野では、画家で美術史論を展開していた黒田重太郎が1920年、『憧憬の地—芸術環境—』<sup>10)</sup>を著した。黒田はフランスで印象派やキュビズムを摂取し、フランス語の *Milieu* の観点から「環境」に接近した。また、アメリカの都市美運動に影響を受けたジャーナリスト柄内吉胤は、1922年、『環境より見たる都市問題の研究』<sup>11)</sup>を出版した。都市環境に対する市民意識と責務にもとづく都市環境改善、都市芸術をめざしたものである。

1921年、藤岡勝二『大英和辞典（大倉書店）』では *environ* は「①圍ム、包ム、封ジル、取巻ク、②環行スル、周行スル、廻（マハ）ル、メグル」、*environment* に「①圍ムモノ、圍繞物、周圍ノ事情、周圍、境遇、環境（クワンキァウ）、環象（カンシャウ）②圍ムコト、包ムコト、封ジルコト、圍マレタ状態、包圍、圍繞」と解説されている。この辞書が「環境」を「環象」より先に掲載した最初である。

## まとめ

以上「環境」という用語は中国の11世紀からの用語である。日本で一般的に使用されるようになったのは、明治維新後、*environment* という用語が日本に紹介され、主体から区別され、客体化された事象としての環境という欧米の概念を翻訳する必要性が高まったことがきっかけであったといえる。とくに1900年代以後、社会的ダーウィニズムの普及以後、その概念を含んで公衆衛生、生物学や教育学の専門領域で導入されたことで広がった。それが、地理学、都市計画学、芸術学（現在の環境デザイン）などにも広がり、さらに1920年代から一般社会でも広く使われるようになったといえる。このように主体と外界との応答関係を説明しつつ、また育てるために導入された用語であることを銘記する必要がある。しかしながら今日、地球環境、経済環境、コンピュータの環境設定など、状況

10) 黒田重太郎、(1920.12)、『憧憬の地—芸術環境—』、日本美術学院

11) 柄内吉胤、(1922.3)、『環境より見たる都市問題の研究』、東京刊行社

のあり方を漠然と示す場面で、多義的かつ広範に使われるようになってきている。今後のよりよい環境社会がどのように概念化、用語化されるのか、継続して考察していきたい。